

音声スクリプト

それでは、これから総合教養の試験を始めます。

メモ用紙を開き、講義を聞いてください。

では、始めます。

この教室のみなさんはおそらく、レオナルド・ダヴィンチ作の「モナリザ」という絵画を一度は見たことがあるかと思っています。

日本では「モナリザの微笑み」という名前でも有名ですね。

モナリザは、世界一有名な絵画とされており、とある批評家によれば

「世界でもっとも知られた、もっとも見られた、もっとも書かれた、もっとも歌われた、もっともパロディ作品が作られた美術作品」

とも謳われています。

しかし、皆さんはこのモナリザという作品が、どうしてこれほどまでの名声を得るようになったのかご存知でしょうか、一見すると、何の変哲もない穏やかな女性を中心に描いているだけで、サルバドール・ダリの独創的な絵画や、ムンクのあの蜷気楼を思わせる歪んだ人影（人影）のように、絵を見る者に強烈な視覚的印象を与えるものではありません。

数多くの観光客が、モナリザを一目見ようとパリのルーブル美術館に毎日訪れていますが、大多数の人は、その「前評判」と「実際の絵の印象」との乖離（かいり）に、落胆して帰っていくようです。

そこで、この講義では、モナリザがなぜこれほどまでに有名な絵画となったのかを、その歴史的な背景から解説していきたいと思います。

そして、これからみなさんがモナリザを眺める際の感覚を、また一味違ったものに変えることがこの講義のゴールになります。

モナリザが現在のような名声を得るようになったのは、実は「絵」そのものではなく、後世の批評家や作家による評価が大きいとされています。

モナリザが持つ、穏やかで優しく、神秘的でもある側面を拡大解釈し、好き勝手なイメージを重ね合わせた批評家や作家が多すぎたせいで、この絵の背景には「作者の思惑とは外れた印象」が付きまとうようになってしまいました。

しかも驚くべきことに、そのような勝手な「モナリザ論」は、ダヴィンチという画家に対しての根本的に間違った知識を前提にして語られています。

この発端は、フィレンツェのウフィッツィ美術館に収蔵されていた、とある奇怪な絵です。

無数のヘビが妖しくウロコを光らせ、斬首された幼女の首におどろおどろしく絡み付いています。

この絵はギリシア神話に登場する怪物であるメドゥーサを題材として描いており、19世紀の半ばまではダヴィンチの作品とみなされていました。

しかし、驚くべきことにこの絵はダヴィンチのが描いたものではなく、現在のベルギー、オランダ、フランスにあたるフランドルの画家が17世紀に描いた作品だと後世になって判明しました。

メドゥーサの絵画がダヴィンチ作と誤認されてしまったのは、美術史の開祖とされる美術家「ジョルジョ・ヴァザーリ」がルネッサンス時代に書いた伝記集に起因されます。

その書物の中では、ダヴィンチが自宅の密室に一晚中閉じこもり、蛇やトカゲやコウモリの死体を集め、それらの部分をつなぎ合わせて、かの恐ろしいメドゥーサの絵を描いたというエピソードが紹介されていたせいで、メドゥーサの絵画がダヴィンチの作品と考えられてしまったのです。

彼の書物は印刷技術の未発達だった当時に60ヶ国語を超える翻訳版が発行され、現代に至るまで芸術論を代表する世界的ベストセラーの地位を保ち続けています。

そして、ウフィッツィの不気味なメドゥーサをダヴィンチの絵と信じてしまった後世の人々が、「モナリザ」と「メドゥーサ」を関連付けて語り始めたことで、近代の「モナリザ論」が形成されだしたのです。

そのような怪奇なモナリザ論を決定的に作り上げてしまった人物は、ウォルターペーターという英国人作家でした。ペーターは、モナリザに肉体的欲望を投影した上に、中世から近世に至る陰謀の歴史のイメージを重ね合わせ、ギリシア神話の全能神ゼウスと、変身した白鳥の姿で交わった女王レダ、聖母マリアの母アンナなど、神秘的に彩（いろど）られた女性像を次々と例として挙げたのです。

そして、極め付けには、画中の女性を「吸血鬼のようにいくども死を体験して、墓の中の神秘を知った」という謎のヒロインに祭り上げてしまいました。

ペイターがこの絵の女性を怪奇なヒロインに祭り上げたのは、彼の生きた時代の英国が、ヴィクトリア朝という、テンプルの脚でさえ布で覆ったという俗説があるほどの保守的な性道徳に支配されていたからだとされています。

当時は、子孫を残すため以外の性的行為は悪とみなされ、女性は性的なことに無知であることが美德とされていました。

その気風との旗頭となったジョン・ラスキンという大御所批評家が、ルネッサンスを金権と快楽主義にまみれた腐敗の時代と見なし、特にダヴィンチなどは、「微笑の奴隷に堕ちた漫画描きに過ぎない」と罵倒したのです。

この辛辣な批判に対して、肉体的欲望や怪奇性、そして幻想性を強調したモナリザの作品解釈をすることで、ペイターは当時の保守的な市民道徳に対して彼なりの反論をしたわけです。

ペイターのモナリザ論は、美術批評としては全く根拠を持たない「散文」に過ぎなかったのですが、この散文が世界的に有名な戯曲「サロメ」を世に送り出した劇作家、オスカーワイルドに

「批評の対象である作品を契機として、見る者が抱いた複雑微妙な印象を、優雅典麗な文体で綴っている点で、最高の芸術批評である」

と絶賛されてしまったのです。

このオスカーワイルドの批評は瞬く間に世界中に広がり、ペイターのモナリザ論はモナリザ批評において世界で最も有名な文章になってしまいました。

世界的に知られたケネス・クラークという現代英国きっての美術史家でされも、「モナリザ」論について書こうとすると、ペイターの「不滅の言葉」が耳から離れず、自分が何を書いたところで希薄で無価値なものにしかならぬように思えると、ペイターコンプレックスを告白しています。

こうして、「ペイター流モナリザ論」の影響で、この絵を論じる際には、ペイターのような謎めいた講釈をしないことにはおさまらないような奇妙な風習が定着してしまいました。

つまり、これほどまでにモナリザが世界的に有名になったのは、画家の死後数百年が過ぎた近代に入ってからのものであり、そしてその名を轟かせた最大の源泉となったペイターのモナリザ論は、原画の趣旨とは無関係に批評家が自身の考えを投影したものに過ぎませんでした。

しかも、それらの投影は全て、ウフィッツィのメドゥーサをダ・ヴィンチ作と見なすという完全に誤った知識に基づいた思い込みのようなものに過ぎなかったのです。

では、ここで新たな疑問が生まれます。

モナリザの現在の評価や印象は他者が作り上げたものとして、モナリザの絵そのものの価値はそのような評価には見合わないものなのでしょうか。

ダヴィンチの師匠が、弟子のダヴィンチの作品をみてこれ以上の絵画を断念したというエピソードの通り、ダヴィンチの写実的な描写は、同時代の人々にとっては感嘆すべきものでした。

事情は今日ではさほど変わらず、長い絵画の歴史を眺めてみても、写実的な絵画技量において、ダヴィンチをしのぐ作家は登場していないと言えます。

モナリザは、ダヴィンチが画力の全てを投入したと感ぜられる作品で、実際にこの絵では当時のヨーロッパの絵画技法の流行がダヴィンチの優雅な筆使いをもって見事に融合されていますので、ルネサンスのみならず、絵画芸術そのもののひとつの到達点を示す作品であることは間違いありません。

人物の表情描写も、その微妙さに比類がなく、また背景に描かれた風景の趣深さも他に類を見ないものといえます。

また、遠くの風景を青く霞ませる「空気遠近法」とよばれる技法は、ダヴィンチが確立したルネサンス絵画の終着点ともいべき、品格にあふれたリアリズムを表現しています。

さらに、この時代の肖像画が担っていた「似顔絵」としての機能を大きく逸脱し、近代の人物表現にもつながる「人物画」としての表現の可能性を見出している点で、画家としてのダヴィンチの先見性、超時代性が感じられます。

よって、モナリザという絵自体の価値を考えても、当時の常識からすれば、ずば抜けた技量と発想により体現された傑作だと言えるのです。

しかし、すでに述べたように、モナリザはこのような作品自体の価値よりも、後世の批評家の勝手な想像によって世間に広まっていってしまいました。

おそらくダヴィンチ自身も、この絵が現在のように世界中で、そしてこの日本という極東の国の隅々にまで知られるこ

とになるとは予測していなかったのではないのでしょうか。

モナリザ論の発端となったヴァザーリの間違いについてどのように考えるべきかは現代でも議論が分かれています、ルネッサンス学者の若桑みどり氏はこう述べています。

「確かにヴァザーリの記述には、真実に反することは多いですから、それを虚構と批判することはできるでしょう。ですが、ヴァザーリがその「事実に反する虚構」をもって描こうとした真実の方こそが大切なのです。」

この「事実に反する虚構をもって描こうとした真実の方こそが大切」という表現は、私たちに深い示唆を与えてくれます。

テレビや報道番組をみても、真実の断片を切り取ることでかえって真実とは程遠い印象を与えている例はいくらでもあります。

もちろん、「虚構」も「真実」のためには許される、と安易に理解することは慎むべきでしょう。

ですが、意図的な選択で「事実」を歪曲するよりは、「虚構」と批判を受けると覚悟してでも、自ら信じる「真実」の方に誠実であるべきだと、私は彼女の言葉から感じられずにはられません。

今日紹介したモナリザの歴史は、みなさんにはどのように感じられたのでしょうか。

おそらく、大多数の方は今日の「モナリザの普遍性」を当たり前のように感じていたと思います。

絵画というものは「それ自体」よりも、後世の批評家の評価によって価値が一気に変わってしまうということが多々あります。

モナリザは、その典型的かつ世界最大の例となってしまった作品だと言えるでしょう。

いずれにせよ、ダヴィンチが残したこの素晴らしい絵画を、これからも世界中の人々が愛し、そして、正しい情報かつ間違った情報を含み、理性的に後世に伝えられることを願うばかりです。